

## マラヤ華人文芸定着化の考察

荒 井 茂 夫

**要旨** 本稿は1930年代から1948年迄のマラヤ華人文芸史を戦前・戦後に分けて検討した。戦前の“地方劇”“地方作家”問題をめぐる論争と、戦後の“僑民文芸”“僑民作家”をめぐる論争における二つの潮流、即ち華人文芸の“マラヤ化”を志向する思潮とあくまでも華人文芸を中国の文学運動に付随させる思潮との衝突を浮彫りにすることによって、戦後の民族独立運動の中で華人がマラヤの複合民族社会における構成民族の一員であることを確認する過程で、華人文芸がそうした意識の先鋒となっていたことを明らかにした。そしてマラヤに定着した固有の文学としての主張を行ない、中国的紐帯を切り離してマラヤの市民権を獲得しようとする努力の過程を考察した。

### 前言

#### I 戦前“マラヤ化”をめぐる論争

1. 地方作家論争と「搬」問題
2. 抗戦文芸論争と中国作家

#### II 戦後“僑民作家”論争と華人文芸の方向

1. 戦後初期華人社会の政治情況
2. 僑民作家論争と“マラヤ化”派の主張

### 結語

### 前言

これまで方修の分期に従って華人文芸拡張期(1925~1931)の発展と政治社会情勢を検討した。これに続く1930年代前半は低潮期とされるが、後半期は救国運動が興起して華僑社会のナショナリズムは空前の高揚を呈し、文芸活動もそうした状況を反映して「救亡文芸」一色となった。戦後この高揚したナショナリズムはマラヤの独立運動の中で変質を余儀なくされ、結局中国政治に対するアイデンティティーを放棄し、定住意識を深めて現地政治社会に志向するようになるのであるが、文壇ではこの間の華人社会の苦悩する状況を“僑民作家”論争の過程に反映させ、マラヤ華人文芸の独自性を強調して中国文壇との緒を断ち切ろうとする姿を浮彫りにしている。

ここで言う定着化とは多人種社会における華人文芸の帰属意識のあり方について言うものであって、文芸活動の単なる継続的展開だけを意味するものではない。

本稿では1930年代から太平洋戦争勃発までの間、及び戦後初期(1948年迄)の華人文壇における論争を検討し、華人文芸がマラヤ固有の文芸として市民権を確立する過程を考察する。

## I 戦前“マラヤ化”をめぐる論争

### 1. 地方作家論争と「搬」問題

マラヤ華人文芸は中国から政治・文化運動がマラヤに波及する過程で誕生したものである。だからその基調は中国新文学運動の延長線上にあり、常に中国文壇の思潮や中国の政治状況を忠実に反映するものであった。しかし一方では“馬華化”(“マラヤ華人文芸化”とでも訳すべきだが、意は華人文芸がマラヤの固性を具有して土着化するということであるから、ここでは“マラヤ化”と訳す。)という言葉に示されているように、現地の生活・風土風俗に根差した創作活動を主張する系譜があった。仮に前者を“中国派”とし後者を“マラヤ化”派として見ると、マラヤ華人文芸史の潮流はこの二者によって牽引されて来たと言うことができる。

華人文芸の拡張期前半(1925~1928)においては〈荒島〉(新国民日報副刊)に拠って南洋の個性を表現し、「南洋群島中の得難い文芸誌」を作り出した一群が現われたのであるが、同時に中国文学運動の影響を受けて興起しつつあったプロレタリア文学の潮流の波間に没してしまった。〈荒島〉同人達の視点はあくまでも華人の生活に据えられており、「華僑の愛国心」を利用する中国からの様々な募金運動等にも冷やかな視線を投げかけ、無意識ながらマラヤ華人文芸史上における独自性主張の初声をあげたのである。しかし彼等には中国から流入する文芸理論に対抗するだけの理論がなかったために、その独自の発展は停頓してしまったのである。<sup>(1)</sup>

さらに拡張期後半(1928~1931)にはプロレタリア文学の中から「南洋文化の創造」というスローガンが出現し、華人文芸を「南洋の色彩を纏わせてマラヤ固有の労働者の情况进行を描き」「各民族労働者の組織化と社会改革の文芸である」と位置付けるようになる一連の議論がなされ、マラヤに題材を採る作品が書かれるようになったのであるが、結局デュクルーの逮捕とそれに続く植民地当局の左翼運動に対する弾圧によって文芸活動も低潮期に入ったのである。マラヤの華人プロレタリア文学に対する議論は、中国の左聯の場合と同じく民族主義文芸の陣営からなされたもので、言わば中国文壇の理論と論争がその儘マラヤに移って来たのであるが、そうした中においてもマラヤ共産党の結成と、その各民族労働者に対する組織活動の積極化を背景として〈荒島〉とは違った新たな意識をもって南洋の地方性を描き、華人文芸史上の“マラヤ化”の系譜に位置付けられるものとなっているのである。<sup>(2)</sup>

1930年代初期のマラヤの華人政治社会は、植民地政府の嚴重な取締りの前に国民党支部は弱体化し、マラヤ共産党も多数の幹部が逮捕されてその活動は停止し、加えて世界的不景気の影響下で低迷した状態にあった。華人文壇では筆禍事件が相次ぎ、作品も恋愛小説や性愛描写を専らにする低俗な作風が支配的となったが、そうした中でも1934年3月廐名(兵士珍)の「地方作家談」<sup>(3)</sup>を切っ掛けに一連の議論がなされる。廐名は〈ソ連作家会議〉における「地方作家を重視して地方文芸の向上をはかる」という決議に基づき次のように主張した。

1. マラヤに住む中国人はマラヤ文芸の地方性について論じる。
2. マラヤの文芸はこの地に居住するか或はこの地で生まれた作家の文芸であるから、マラヤに文芸があることを確認して地方作家という言葉の意味を把握し、上海にこそ文芸があるという考えに反対する。
3. 地方作家とは、およそある所で文芸に従事し、その地方に貢献する作品を書く者であ

るから、その地位は文壇の中心作家と同じである。故にマラヤの地方作家を尊重す可きで、上海ばかりを文壇の中心と見倣す中国の文芸作家を盲目的に尊崇す可きではない。

4. 価値は作品のもつ社会的任務の積極性によるのだから、地方に埋もれている作家でも任務を果す成果をあげているならば重視す可きである。
5. 上海文壇を崇めることをやめ、マラヤにおいて団結し、協力してマラヤ文芸の社会的任務を推進す可きである。

そして地方作家として14名の作家を挙げたのであるが、これに対する反論は二方向からあった。一つは彼の主張に基本的には同調するが、地方作家の選び方や華人文壇情況の評価に係わる事項について異議を唱えるものである。<sup>(4)</sup>これは「マラヤ化」系譜上の発展的議論であると言える。しかし久寡や長江等の全く地方作家の存在を認めない立場から冷言を浴びせられた廃名は、「南洋文壇に苦笑を投げかけて」論争から一時離脱した。ここで「中国派」として概括される意識は廃名の批判する華人作家達の根強い中国志向なのである。この論争の「マラヤ化」系譜上における意義は、1) それまで漠然と「南洋」と呼ばれていた地域性から、マラヤという明確な地理的概念を提示してマラヤ華人文芸の存在価値を主張した。2) 地方作家の意味と役割を明示して、マラヤ華人作家の地位を中国文壇の中心と対等の関係に置いたことである。マラヤの華文学の中国文壇の附随的位置からの離脱と自立発展を主張しているのである。

これに続いて曾艾狄の「馬來亜文芸界漫畫」<sup>(5)</sup>（1936, 9）に端を発する議論も「マラヤ化」論争の理論的發展をもたらすものであった。曾は中国本土の「国防文学」の高潮の後「マラヤの雑文家がその形骸を移して来て原稿料を搾取しているが、中国文壇のスローガンをその儘もって来ても現実の行動には結びつかない空虚なものである。マラヤにはマラヤの文芸の生命がある可きであって、中国の模倣・公式主義であってはならない。マラヤ現地の題材を発掘しなければならない。」と言って中国文壇における思潮の盲目的な移入（これを「搬屍」と言っている）と追隨を批判した。これに対する反論は馬達の「對『馬來亜文芸界漫畫』の意見」に表わされているように、曾の挑発的論調に対する批判や言葉の解釈に関する議論であって、地方性の主張を崩すだけの反論はなかった。さらに一礁（姚寄鴻）がこれに応じて「關於馬來亜文学的諸問題」<sup>(6)</sup>の中で明確に論を發展させた。一礁はまずそれまで曖昧であった華人作家の言う所のマラヤ文学という語の意味は、本来マラヤ社会を構成する四民族（マレー人、インド人、中国人、英国人）の文学を含むものであって、中国人の文学は「マラヤの華僑文学」と名付ける可きものであると論断し、作家達が盲目的に中国の文学運動に追隨するのは「移民觀念」から脱していないためであるとして問題の本質を突いた。また「華僑文学」を世界文学の一環に位置付けることによって、中国新文学運動を等距離に置き、その上で中国文壇の思潮を紹介し、必要なエッセンスを見出す可きなのであると言って、曾艾狄の批判する「搬屍」の問題についても発展的な解決を提示した。こうした思想から、一礁は作家の果す可き社会的任務はマラヤの社会にあり「祖国」（中国）にあるのではないとの認識をもって、マラヤに生活する者が「この社会の進歩に一日の努力を実践」しさえすれば、中国の文芸思潮に牽引されたり盲目的に追隨することもないのであると呼びかけた。一礁の論理は結局「マラヤの新文学」を打樹てることによって完結する。つまり「華僑の文学」とは当時の客観的な事実から導き出された語であって、華僑作家達はそうした文学を作る為に努

力するのではなく、「マラヤの新文学」を打樹てる過程で「華僑の文学」は葬られて行く可きものなのである。それまでの諸々の議論は全て「華僑の文学」に付随するものであるから「マラヤの新文学」建設によって一切の議論を止揚するということであった。

一礁によって「マラヤ化」の理論は明確にされたと言えるが、言う所の「マラヤの新文学」の理念については、単に「反封建・民族の自由更生の大衆文学かも知れない」と言うだけであったし、核心であるマラヤ社会の四民族の間の交流についても「華僑は夜郎自大でマレー人、インド人に偏見をもっているから各民族の文化を翻訳紹介し、創作の中に採り入れなければならない。」と指摘するに止まった。

時代はマラヤ共産党がコミンテルンの人民戦線・反ファシズム連合路線をうけて、マラヤ共和樹立を目標として労働者、農民、小資産階級による統一戦線結成を策し、中国系以外の人種に対する浸透工作进行している時であった。だから当時マラヤの左翼知識人のそうした自覚は、吳文翔の「現階段馬來亜文化工作的體認」<sup>(7)</sup>に見られるように、マラヤ社会に内在する問題を世界的な視座で認識して世界の反ファシズム平和路線と共闘す可しというものであった。曾艾狄の考え方はインターナショナルな視点から理論的補強を得たのであるが、しかし現実には植民地支配の堅固な籠の中で、一礁の指摘するような華僑のアイデンティティーに係わる心理は切実な問題となって浮上してはいなかった。また中国世界を等距離に設定して見ることなど当時の華僑政治社会の感情からは掛離れたものであった。華僑社会には救国運動の伝統と根強い愛国心があったのである。1936年から1937年初頭だけでも陳嘉庚を中心として「新加坡華僑購機慶祝蔣院長寿辰委員會」が組織され、130万余元を募り航空機13機を南京政府に送り、さらに「新加坡華僑救国援蔣大会」が組織され、中央政府支援行動を展開、また綏東事件の戦災に対する救国募金、四川省の大旱魃被災者に対する救援運動等が行なわれ、<sup>(8)</sup>祖国救援の為に華僑社会が広範に呼応し、愛国運動が再び盛り上がりつつあったのである。

## 2. 抗戦文芸論争と中国作家

1937年7月日中戦争が勃発すると中国国内の運動に呼応してマラヤ華僑社会でも空前の救国運動が展開された。8月には陳嘉庚がシンガポールで全市僑民大会を開き「星華籌賑会」を設置、翌年には「南僑籌賑会」が結成され全東南アジアの華僑救国運動が統一的に展開されるようになった。そして第二次大戦が勃発すると「華僑抗敵動員総会」の結成へとその愛国心は高揚していった。こうした救国運動のマラヤにおける指導者は陳嘉庚とその周囲の愛国的商人であった。陳嘉庚はマラヤゴム業界の巨頭で、ゴム公会は彼の兄弟、親戚が支配的地位に就き、その財力的背景とシンガポール華僑人口の43パーセントを占める福建幫を組織動員の基盤として、さらに福建人富商の会である怡和軒クラブに各幫の指導的富商を吸収し、他幫にも影響力を与えつつ救国運動を指導したのである。<sup>(9)</sup>1937年から40年までの間にマラヤから中国に送られた救国資金は34万元を上回り、全東南アジア華僑からの救援額の半分を占めるほどであった。当然中国政府の華僑に対する経済的な期待も高く、1937年10月には財務部長孔祥熙がシンガポールに派遣され、戦費の4分の1の釀出を要請した。これに対し翌年10月には南洋華僑籌賑祖国難民総会で1937年7月から翌年8月までの間の公債消化額及義損金等の額は1日平均7万元になり、その他家族送金も合計して毎月の戦費7～8千万元の4分の1を負担したことを表明しているし、慢性的な中国経済の入超を華僑の送金が補填して

表1 中国の対外貿易入超と華僑送金対照表

(単位: 中国元)

年度	入 超 額	華僑送金額
1930	649,432,000	106,300,000
1931	816,413,000	190,000,000
1932	867,191,000	320,000,000
1933	733,739,000	300,000,000
1934	494,451,000	250,000,000
1935	343,402,000	260,000,000
1936	235,803,000	320,000,000
1937	115,130,000	300,000,000
1938	123,558,000	600,000,000

出所: 柯木林「新加坡僑匯与民信業研究」169頁

余りある程であったのである(表1)。1937年後半期以後1941年までの抗戦期に世界の華僑から送金された総額は53億元、月平均11億7千万元にのぼり、この内マラヤからの送金額は約7分の1、年間1億6700万元を占めるが、1938年の中国の対外貿易入超額と対照してみるとマラヤだけでも中国の入超を大きく上回っていることが分る。中国政府はこのようなマラヤ華僑社会の救国運動をより活発にさせるために、最も大衆的效果を期待できる映画、劇団等を送り込んで抗日愛国宣伝を展開した。「武漢前鋒殲滅戦」「熱血忠魂」「八百壮士」等の実際の戦闘にもとづいた映画や、「保家郷」「保衛中華」等の抗日ドラマまで全て民族的情緒に強く訴える内容のものであった。<sup>(11)</sup> 1938年来から翌年夏にかけて、中央宣伝委員会から派遣されてマラヤ各地を回った抗日劇団武漢合唱団は非常な歓迎を受け、売上げは230万元に達し、さらに1939年6月に派遣された新中国劇団は27回の上演で100万元を集めたという。<sup>(12)</sup> マラヤ華人文芸界における演劇運動は、当時上海で「救亡戯劇」を鼓吹していた「光明雑誌」(洪深編)の影響を受けて、夙に「反戦愛国を華僑同胞に伝道する可し」という方向性を持っていたが、中国からの劇団来訪を機に活発に活動を始めていたのである。1938年1月には演劇界同人名で「馬來亜戯劇運動綱領草案」<sup>(13)</sup>が発表され、民族抗戦にあたり「総動員」(中国における)の旗の下に演劇はその特殊な機能を以って先鋒に立ち、「救国の為の演劇運動を行ない、その力で大衆を教導、組織し、華僑救国統一戦線を結成することを目標とすることを宣言し、マラヤ各地の華僑学校を主な会場とした上演募金活動を推進して行ったのである。特に効果を期待するために上演は方言によってなされたのだが、華僑教育における国語教育の重点政策を考慮すると如何に演劇の宣伝効果が重視されていたかが分る。第2次国共合作という好条件の下にマラヤの愛国運動は華僑史空前の高揚を呈した。以上のように全華僑社会に対して強い影響力のある商界を中心とした指導は植民地政府も認めた活動であったが、一方マラヤ共産党は「華僑各界抗敵後援会」を組織して独自の活動を展開した。非合法団体「抗敵除奸別動隊」や「馬來勞工抗日団」等の組織によって直接行動を行ない、漢奸の摘発制裁、日系鉱山労働者や港湾労働者の対日ストライキ指導、日本商社の華僑従業員に対する離職勧告などを行なった。こうした非合法団体の構成員は1万人に達するといわれ、1938年中に百人の活動家が逮捕されている。<sup>(14)</sup> また漢奸摘発の被害者のほとんどがババ華人(マラヤで生れ育ち中国よりもマラヤや英国に忠誠心を持つ)であったということは、マラヤに定着し「マラヤ化」

或は英国化して、しかも富裕な者が多い彼等に対する中国民族主義からの非難であると理解すると、華人文学運動における二つの意識の実際をよく示していると言えよう。こうした直接行動組織以外にも、マラヤ共産党の外部組織である「青年救国同盟」やアマチュア劇団等は商界指導の民族派の運動の中で着実に勢力を伸張して行った。そして1941年12月日本軍がマラヤに侵攻すると、マラヤ共産党中央執行委員会は武装抵抗を決定し、陳嘉庚が植民地政府に申し入れて作った「抗日動員委員会」の下に組織された華僑民兵団「Dal Force」(指揮官 Dalley の名を冠した、兵力は2千人、)に合流し、その中心勢力となって英軍に協力、作戦に参加したのである。<sup>(17)</sup>抗日救国運動が盛り上がる華人社会において、当然文学運動も中国と同じく「抗戦文学」「戦時文学」一色となって行く。マラヤ華人作家は従来組織されておらず、それが低潮期の問題の一つとなっていたのだが、1937年にはベナン、イポー、シンガポール等の主要都市と中部マラヤ各地に作家、文化人の団体が結成され、連携して華僑大衆の愛国心の喚起、募金、キャンペーン等の行動によって華僑社会の現実の救国運動に呼応したのである。マラヤ華人文学界のかかる高揚した状況の中で汪金丁は1938年1月から5月にかけて南洋商報に「抗戦文芸講座」<sup>(18)</sup>と題する一連の論文を発表し、中国における理論と方針を華人文学界に示し、その具体化を呼掛けた。前後して中国における抗戦文芸運動と同様に、文芸の「通俗化」「大衆化」「民族形式」等のテーマについて議論され、多くの作品が書かれ空前の活況を呈した。

本来中国志向が圧倒的である華僑文芸界を批判して「マラヤ化」の理論を提示した一礫は、この間の議論には登場していない。当時彼はメダンに居たのであるが、彼がマラヤから離れたためにその理論の具体化は抗戦文学の波に掻消されてしまったと言えよう。そうした状況下においても「マラヤ化」の方向は尚その主張を堅持し華人文芸史上の陣営を維持した。小紅(呉文翔)は「關於南洋の戦時文芸」(南洋商報〈今日文学〉1938, 2, 21)と題する文章において、南洋には「戦時文学」は適合しないし不必要であると論断した。その要旨は「戦時文学は戦争状態の下で生まれるもので、戦闘精神を高揚させ大衆を動員するために『通俗化』して読みやすくし、また短編に重点を置いて読了を容易なものにする為に水準を下げる。こうして文化水準の低い大衆を吸収すれば文学も一つの武器となるのだが、マラヤは戦争状態にある訳ではないし、南洋の華僑同胞は中国とは異なる土地と風土と政治状況の下で苦しくとも太平な生活を過している。そこで日本帝国主義の残酷性を示しても実感がないのである。戦時文学は中国の現実から生まれたものであるから客観的根拠と具体的内容がある。けれどもそれはマラヤにおいては事実の伴わない空虚なものなのである。華僑も中国人なのだから中国と無関係ではいられないし、国家患難の秋、華僑も祖国に貢献す可きなのだから戦時文学の提唱は救国運動の観点から見ても誤りはないと反論されようが、しかし救国は概念であり戦時文学は方法なのである。換言すれば救国は華僑全体の共同目標であり、一人一人が負う可き責任であるとしても、如何にしたら救国の責任を負うことができるか、その方法に問題があると言うのである。戦時文学提唱者の目的意図は分かるが、南洋の地理・風土・政治状況を考慮しなければ誤りである。必要なのは募金・寄付活動・民間外交・世界の民主平和勢力との連帯活動などであって戦時文学という方式ではない。」そしてマラヤに必要なのは「華僑救亡文学」と称す可きものであると主張した。救亡文学は1930年代初頭に中国の情勢に応じて提唱されたもので、戦時文学のように抗日的意義が突出していないために、およそ国防に関するものを包含できる幅広い性質を具えるものであった。だからこそ呉文翔は応

用したのであるが、しかし逆にその点から汪金丁に「南洋の文芸工作者は何も戦闘精神を高揚させるような戦場を描く必要はない。知らぬことを勝手に書く可きではないが、書く可きことは漢奸・日貨ボイコット・ゴム園労働者の失業問題等々いくらでもある。華僑が中国の民族独立解放の為に尽すことは祖国同胞の任務と全く同じであり、政府を支持して民族統一戦線の為に闘うことは愛国的華僑同胞の鉄の原則であるのだから、南洋の文芸運動は当然抗戦文芸運動なのである。」(『評小紅的『關於南洋の戦時文学』』(南洋商報〈獅聲〉1938, 3, 1)と反論され、張曙生からは「南洋の戦時文学は現実に大衆に歓迎されているし、もし『太平に過している』と言うならば殊更積極的に教導す可きである。呉文翔の論は『戦時文学』プラス『客観環境』イコール『華僑救亡文学』という単純な算式である。」(『關於『南洋の戦時文学』の商榷』(南洋商報〈今日文学〉1938, 3, 14)と揶揄され、また鉄抗には「形式は現地読者の程度と読書時間量によって決まる。辺境の非漢族地域では内容も形式も特殊な情況に合わせたものになる。同様に南洋においてもその社会情況に合わせるのは当然である。戦時文学が戦争状態にある中国本土にだけ適合するというのは皮相的な考えである。」(『關於『南洋戦時文学不適合論』』(星洲日報〈文芸週刊〉1938, 3, 13)と反駁された。呉文翔の情況は全く四面楚歌となり彼を支持する者は誰もいなかったのである。竟には「小紅の様に奇をてらって新しいスローガンや路線を示すような文章を軽率に発表することは敵のスパイやトロッキストを喜ばせるだけである。」(汪金丁, 同上)と非難されるに及び、呉文翔は「我的總答覆——關於『南洋戦時文学』的話」(南洋商報〈今日文学〉1938, 3, 1)の中で「文学については門外漢で、諸々の問題について深く研究している訳ではない。もし理論的な誤りがあれば批評を受け入れる。」と言って議論を回避した。しかしそれでも「真理は大衆の中にあり誰も私有することはできない」としてその基本的「マラヤ化」の主張は崩さなかった。また両者の折衷的な形で驕恣が「戦時華僑救亡文学」を提唱するが、彼は華僑の社会文化を全て中国の一部と見做し、当然文学もその一環にあるとする立場であるから本質的に呉文翔とは異なった。呉文翔の議論の本質は、文学創作においてあくまで中国の運動とは一線を画そうということである。これは彼の一貫した主張であり、1937年12月に同時に上演された「傷兵医院」と「怒濤」をめぐる彼の批評に対する非難に対してもその主張は崩さなかった。前者は葉尼(呉天)の創作による蘇州・上海地区の抗日戦争を題材とした作品で、後者は愛同校友会のグループ創作劇で南洋に題を採ったものであった。呉文翔は傷兵医院の生々しさはマラヤの大衆には実感が湧かないので救国感情を喚起する効果は薄いとし、南洋の漢奸商人を描き出した怒濤の方が、芸術性はともかく華僑大衆に身近な事象を通して感動を与える効果があると批評したのである。これに対する「地方性、身近な生活経験と言うが、作品の真実性は機械的に認識されるものではない。現実主義的作品は典型的な題材によって一つの必然性を示すのだから正確な認識と主題・材料があればよい。傷兵医院は抗戦文芸に位置付けられているのだから、劇は批判されてもその題材を否定することはできない。」(田「為建立救亡戲劇運動商榷于文翔先生」, 星洲日報〈晨星〉1938, 12, 13)という反論に対しても、彼は地方性の主張理由を次の四点に整理して僅かな譲歩を示しただけで基本的主張は崩さなかった。1. 観衆が理解しやすく教育効果があがる。2. 作者、演出家、出演者も皆容易に上演に対応できるので効果的である。3. 南洋地方劇は創作も上演も少い、今後の発展の為に力を入れる可きだ。4. 時局危急の時、前戦の様子を知らせる為には戦場を描いた作品も上演す可きだが、華僑大衆の団結と救国活動推進の為には地方劇に重点を置かざるを得ない。

唯この論争における呉文翔の主張は思想性に支えられた論理ではなかった。既に見たように彼の思想からすればむしろ田の論に近い考えに達するであろう。作品の題材としての地方性に対する固執は、やはり馬達が曾艾狄を「感情的」と評したように「マラヤ化」志向の心情を優先させているであろう。

1937年後半から翌年初頭にかけては、抗日運動の高揚を背景として、同時に華僑知識人の間では帰国参戦が議論されていた。星中日報、南洋商報の編集者及び啓発学校校長が帰国参戦したこと、耶魯が知識人の抗戦支援活動の遅れを指摘し「如何にしたら華僑知識人を動員して帰国参戦させ、また留まらざるを得ない者は何をなす可きか」(「海外知識份子当前一箇嚴重的問題」星洲日報〈晨星〉1937, 9, 23)と言って問題を投げ、議論を喚起した。続いて「文化人南来逃難の異議」(羅文、閩粵地域の情勢緊迫に従いマラヤに「南来逃難」した人々の中に多数の文化人が含まれ、彼等がマラヤで教職に就いて生活しようとしている為に教育界が騒然としていることを指摘、「華僑教育界では「北帰赴難」を議論している、覚悟さえあれば抗戦工作に参加できるのに何故「南来逃難」するのか」と非難する。)及び「別了、朋友們」(澀人、白雲、二人の筆者が「抗日戦の火炎に激発されて前線に赴くことを決心した」と愛国心を吐露し「帰国赴難」するに当り華僑文壇に遺した辞。)この二つの論文が南洋商報の〈獅聲〉に同時に掲載(1937, 12, 30)され、中国文化人の「南来逃難」が大きな問題となったのである。日中戦争勃発によって沸き上がる華僑社会の救国運動を支えていたのはこうした中国政治と一体のナショナリズムであった。本来華僑社会には、中国本土から時間・空間的に遠く離れている故に、祖国・故郷を思慕する強い感情があった。それが中国からの人・情報の流入、或は宣伝によって増幅され強力な愛国主義の基礎となっていたのである。であるから呉文翔の主張する「華僑救亡文学」が生温いとして四面楚歌となった根本の原因はこの中国にアイデンティファイされ華僑ナショナリズムの空前の高揚にあったのであるし、「南来逃難」が怯懦であると非難された原因もここにあったと考えることができる。汪金丁、葉尼、鉄抗、張曙生等反「マラヤ化」の論陣を張った人達は皆1936年末から翌年末にかけてマラヤに來た中国文化人であった。特に汪金丁と葉尼は徹底的な中国志向の主張をして各々後に帰国してしまう。当時彼等の立場は非難される側に近い位置にあったのである。彼等に代表される「マラヤ化」批判と中国の命運と一体となった華僑の愛国・抗戦の主張は、華僑文壇のナショナリズムを牽引するのに力を発揮したが、遂にその中から成長した耶魯に代表される華僑ナショナリズムの側から批判されることになったのである。

しかし日中戦争のエスカレートに従い、とにかく華僑文壇は抗戦支援に統一され、太平洋戦争が勃発すると「保衛馬來亞」というスローガンが出され、さらに1941年末には「抗敵衛馬」が文芸の緊急任務となった。盛り上がる抗日運動の中、日本軍のマラヤ侵攻によって華人文学運動は3年半の空白期に入ったのである。

## II 戦後僑民作家論争と華人文学の方向

### 1. 戦後初期華人社会の政治情況

戦後マラヤ華僑の政治社会では、連合国勝利の波に乗って国民党支部の活動が復活し、1949年に解散するまで、華人社会の中国政府に対する支持と忠誠を確保することを最大の目的として宣伝活動を展開したが、一方では戦前華僑社会の有力なリーダーであった陳嘉庚の国民



党不支持が明確となり、華僑政治社会を二分して論陣が張られるようになった。

陳嘉庚は戦前華僑慰労団（1941）を率いて中国各地を視察した際、夙に国民党治下の腐敗と延安の質朴な生活を比較し国民党に対する失望と不満を表明していた<sup>(25)</sup>。陳嘉庚がマラヤに帰ってから、南洋商報紙上でそれを代弁したのが抗日救国運動期に招かれて同誌の編集者となった胡愈之であった。1946年陳嘉庚は「南僑日報」を創刊し胡愈之を社長として迎え反国民党の論陣を張り、南洋華僑籌賑総会主席の名でトルーマンに打電し国民党政府を非難、米軍の撤退と軍事援助中止を要請した<sup>(26)</sup>。これに対して左翼団体や厦門大学校友会（陳嘉庚の寄付で福建省厦門に設立された大学）は支持を与えたが、マラヤ各地の中華総商会は一千万華僑の意を歪曲するものであるとして非難を浴びせた<sup>(27)</sup>。こうして中国共産党支持派と国民政府支持派の対立が浮上したのである。陳嘉庚の活動は一貫した愛国主義に支えられており、その立場から国民党官僚や行政上の腐敗、またその統治下で彼が体験した風紀上の問題等に中国の将来を托すことの不安を感じ、戦後祖国の分裂状況を統一して建国の将来に進む希望を延安の質朴さと団結、清新の気風の中に見出したのである。そうした陳嘉庚の活動の理論的或は論陣の先鋒となったのが胡愈之であったと言えるし、また陳嘉庚も胡愈之の活動を全面的に支援したのである<sup>(28)</sup>。彼は1946年シンガポールに設けられた中国民主同盟マラヤ支部を指導した。その基本的姿勢は、中国の民主平和と団結の為の宣伝と教育に従事し、マラヤの政治には直接参加しないが必要ならば第三者として意見を提供するというもので、中国の民主勢力に対する華僑社会の支持を呼びかけることが目的であった。胡愈之は南僑日報に参加する以前、1945年12月に週刊雑誌〈風下〉（1948年6月停刊）を発行し、王任叔（巴人）、楊騷、汪金丁等の抗日救国運動末期にマラヤに來たことのある中国作家、また南僑日報の編集に携った夏衍等戦後マラヤに來た作家を傘下に入れ、さらには茅盾、郭沫若、何其芳等中国の著名な作家と連絡をとり、その文章を常に掲載して華僑知識人に対するアピールを行った。〈風下〉によって華人文芸界に対処し、〈南僑日報〉によって政治主張を展開する陳嘉庚、胡愈之等の運動は、民主同盟を通じて「マラヤ抗日軍退役同志会」「新民主主義青年団」「泛マラヤ労働組合連合会」等のマラヤ共産党系の組織とも連絡はあったが、それは反国民党という接点においてであって、マラヤ連合制に反対するマラヤ共産党の活動には参加しなかった<sup>(29)</sup>。また中国致公党のマラヤ支部もあったが、民主同盟と同じくこれら中国志向左翼勢力は毛沢東と中国解放の宣伝に重点をおき、マラヤ共産党を重視しなかったばかりか、その指導者達は知的に劣っていると見做した。このため貧しく高等教育も受けていないマラヤ共産党の若い指導者達と民主同盟には潜在的な敵意があったと指摘されているように<sup>(30)</sup>、結局マラヤ共和国樹立を目指すマラヤ共産党の現地指向とは相入れない所があったのである。

〈南僑日報〉〈風下〉に拠り中国共産党及中国の民主勢力を支持する陳嘉庚や胡愈之等の民主同盟、また中華総商会及伝統的諸団体に拠り胡文虎の〈星洲日報〉や〈総匯報〉を通じて蒋介石政府支持を呼びかける国民党系勢力も、ともに中国志向の政治姿勢であった。双方の規模は明確ではないが、民主同盟の構成員は130人程度であったし、また中華総商会や各幫団体も全員が積極的に政治に関与した訳ではなかった。それ故にこの両勢力は中国政治に左右され、戦後初期には国民党支持が圧倒的で、内戦で国民党の敗勢が明らかになると今度は民主同盟が優勢となった。しかし現実のマラヤ政治の動態はマラヤ共産党の活動と英国当局との間にあったのである。

当時マラヤ共産党は、戦中は英国側のスパイとして、また戦後は日本のスパイとして活動

しその地位を築いたライテクの指導下にあったが、1947年には経営者の団結とそれに対する植民地政府の支援という労働運動の危機に直面し、さらにはマラヤ共和国樹立という目標に進もうとしない「穏健政策」に対して、陳平を中心とする同党急進派の挫折感は深まる一方であった。彼等はクアラルンプールの高級住宅地区で都会生活を享受しているライテク等党幹部に対する非難を討議す可く1948年3月6日党執行委員会の開催を予定したが、ライテクは直前に党資金を持って逃亡してしまった。この結果戦闘的グループの指導者であった陳平が書記長に選出され、翌1948年3月の中央委員会で武装蜂起路線が採択されたのである。同路線は第二次大戦直後にマラヤ抗日人民義勇軍を解体し、武装解除して自らマラヤ共和国樹立の可能性を潰してしまったことを自己批判し、本来の目標に向かって進もうというものであった。ただこの路線は中国共産党、或はコミンランからの指示があったわけではないという<sup>34)</sup>。マラヤ共産党独自の選択であったのである。こうしてマラヤ共産党は同年から武装闘争に突入した。ジャングルを拠点として周辺の農民、不法居住者の間に補給網を作り、地主、農園主に対する暗殺、脅迫活動を開始したのである。この為6月に全マラヤに非常事態令が発せられた。

## 2. “僑民作家”論争と“マラヤ化”派の主張

この間マラヤ華人文芸界では、1947年から「マラヤ華人文芸の独自性」が強調されるようになって来た。「マラヤ人民が民主自由、民生改善、民族解放の為の闘争を進めている現実、今後のマラヤ華人文芸がマラヤの民主、民族運動をその任務とすることを明らかに示している。」(漂青「關於馬華文芸独特性」星洲日報・晨星1947,10,4)<sup>35)</sup> こうした情況から「マラヤ華人文芸の独自性」(「馬華文芸的独特性」)が提起されたのである。当時はマラヤの独立をめぐる英国側の提示したマラヤ連合案に対するマレー系の反発、また非マレー系の要求が交差し独立に向けてマラヤ全体が騒然としていた。そうした中で華人文芸の独自性を主張する華人作家の時代認識は「戦争がマラヤ華人社会に対し、自身の運命とマラヤ各民族の運命とは利害一致するという新しい認識をもたらした。マラヤの民族解放運動と一体となり、マラヤ人民としての姿でこの闘争に参加してこそマラヤ華人文芸はその生命を全うできる。」(凌佐「馬華文芸的独特性及其他」星洲日報〈晨星〉1947,11)<sup>36)</sup> というものであった。だから「マラヤ華人文芸の新しい段階の始まりは、現実的意義を失った“僑民文芸”を否定し、抗日マラヤ防衛の壮烈な流血の戦闘を基点として、マラヤの民主、自由、独立を実現する歴史的任務の為の闘争を華人文芸の新しい具体的内容としなければならない。」(同上)と主張したのである。太平洋戦争で日本軍の侵攻に対して身をもって戦ったのは「保衛馬來亜」のスローガンの下に義勇軍に参加したマラヤ共産党員や民族主義に燃える青年達であって、国民党系の金持ちや、抗日宣伝につとめた中国作家達(胡愈之、汪金丁、楊騷等)はマラヤを離れて行ったのである。こうした思潮の中で、周容がもっぱら中国の解放を宣伝する作家達を批評して「新聞を手にして彼方の空を眺める“華僑作家”の態度は早く矯正しなければならない。……マラヤに身を置き中国人民の“大翻身”を待つなどは、“僑民作家”どころか“逃難作家”である。」(「談馬華文芸」クアラルンプール〈戦友報〉1948,1)と激しく非難し、さらに“僑民文芸”の清算を要求したのである。これに対して胡愈之は「マラヤの現実を反映する文芸と言っても必ずしも1948年のマラヤに題材を採る必要はないし、マラヤの作家だけが書けるものとも限定できない。魯迅はマラヤに来たことはない。しかしマラヤ華僑社会の現実を反

映した作品の中に『狂人日記』や『阿Q正傳』に匹敵する作品はない。……マラヤの文芸に独自の内容があるとすれば、外でもない周容先生の反対する〈人民翻身〉である。〈人民翻身〉とは何のことはない、〈民族解放〉の四文字の通俗的な言い方である。これ以外にマラヤの〈此時此地〉の現実に適ったものはないのではないかと問いたい。……謂う所の“僑民作家”“逃難作家”という語が成立するならば、ゴーリキがその始祖であろう。彼はドイツ、米国に“逃難”し、イタリアには10年余居住したが、彼の不朽の作品の中には晩年イタリアで書かれたものも多い。しかし当時のイタリアに題材を採ったものは見たことがない。当時のイタリアの作家が我々の「マラヤ華人作家」のように進歩していたならば、ゴーリキを“大国民思想作崇”と決め付けたかも知れない。」（「朋友，你鑽進了牛角尖里去了！」「友よ気をつけよ，君は袋小路に入ってしまった。」〈風下週刊〉1948，1，10<sup>97</sup>）と反論した。さらに「牛角尖」（牛角の先）という語が「吹牛皮」「対牛彈琴」或は「牛字旁」等の語で人を馬鹿にする言葉と誤解されたとして、今度は牛角の図解を入れて説明し、最後には「新聞をよく見て〈此時此地〉のマラヤの現実を把握できれば、牛角に入りこんで空想するよりはましである」と揶揄した。「牛角尖」は思いつめるとか思い込むという語感がある。牛の字は中国語では一般に“がんこ”“つむじまがり”“意地っ張り”“ほら”“はったり”等の意味で人を揶揄したり軽蔑したりする語として多く用いられる文字である。図示するほどの用意があったのならば、1ヶ月も過ぎてから「牛角尖図解」（〈風下週刊〉112期1948，2，7）を書くまでもなく頭初から提示できたであろう。周容の言辞も厳しいが、「逃難作家」と言われた胡愈之が感情的になっているのも確かである。こうして“マラヤ化”派とそれに反対する“僑民派”（“中国派”）との論争が展開されたのである。僑民派の理論は総括してみると戦前の呉文翔批判と同じく、〈此時此地〉という文芸におけるマラヤの現実の反映とは、内容、題材や表現の処理についてであって、基本思想は反帝反植民地主義、民族解放の国際主義なのであるから、中国の解放もマラヤの解放と同じく民主陣営内の共通する闘争である、したがって文芸内容も一つ共通性の上に作られるものである。だからマラヤ華人文芸の独自性というものはない。文芸内容の普遍性を無視すれば華人文芸は孤立するし、マラヤ以外に受け入れられない作品は何の発展もないというのである。これに対して“マラヤ化”派の理論的主張は苗秀が次のように整然と論じている。「マラヤは世界の植民地解放運動の一環にあるが、その運動は特殊な闘争形式をとっている。つまり中国人、マレー人、インド人の三大民族の連合によって民族統一戦線を結成してこそ民主自治の実現が可能なのである。マラヤの華人は数百年の歴史をもち、人口も多数を占め、経済的にも優位であるが、マラヤの今日の繁栄に幾多の華人の血と汗が流されたか計り知れない。もはや我々は僑民的運命を甘受す可きではないし、僑民ではいられない。僑民ではマラヤの政治に係わることはできない。自身の利益を保障するために政治に参加して行かなければならないし、而も華人はマラヤを構成する一民族としてその他の民族とともに自由解放を目指さねばならない。……文芸が政治運動の一翼であることを認めるならば、華人文芸はマラヤの民族解放闘争に結合しなければならないし、マラヤ人民の立場に立つならばマラヤ華人文芸は中国新文学の附随的地位から脱し、独立発展、進歩しなければならないのである。その独自性を強調し、独自性を創作の中心とするのは当然である。新聞を手を持ち彼方の空を眺めて中国解放区人民の大翻身を称賛する“僑民文芸”はこの新しい責任を負えない。……彼等がマラヤ華人文芸の闘争に参加し、現地人民の解放に協力することを願って“マラヤ華人文芸の独自性”は提起されたのである。僑民派は資本主義社会を反映

する文芸と社会主義を反映する文芸しかないと言って特殊性を否定するが、それは成立しない。文芸は具体的形象を通して現実を反映し、普遍性は必ず特殊性によって表現されるのである。資本主義社会の文芸も国によって異なるのである。」

この論争はマラヤ共産党の華人青年指導者層とマラヤ華人作家(“マラヤ化”派)との共感を背景としている。彼等は華人はマラヤに帰属する一民族であるという共通の意識と、三大民族の統一戦線によるマラヤの解放という共通の目的をもっているのであるが、そのための活動が華人社会においては民主同盟“中国派”によって阻害されていたのである。1947年陳平等マラヤ共産党の青年指導者達が焦躁感を深めライテクを追求しようとしていた頃、華人社会内部では中国共産党の主張に共感を抱き、その成功に感銘を受け、中国共産党が勝利すればマラヤの革命は必要なくなり、華僑は中国へ帰国できると考えたり、共産党政府が華僑保護の為にその力を行使するだろうと考える傾向が生じて、それが大いにマラヤ共産党の勢力拡大工作を阻碍した<sup>(38)</sup>と言うのである。その数量的事実は示されようもないが、南僑日報や風下を先鋒とし、民主同盟支部に拠る“僑民派”の宣伝活動が影響していることは明らかである。民主同盟がマラヤ共産党青年指導者達を軽んじたことは、“マラヤ化”派華人作家に対する言辞の中に映し出されているのである。それは“牛角尖図”ばかりでなく苗秀の次のような言葉に端的に表わされている「胡愈之は、最近中国から来る知識人が多いために、マラヤ華人作家達は背伸びして自ら知識份子となりすまし、『独自性』を主張することによって指導権を争わんとしているなどと言うが、全く我々を侮蔑するものだ。」(前出同上)さらにこの論争に意見を求められた郭沫若は極めて説得的、合理的に「マラヤ華僑青年が土着の文芸を創造することは称賛できる」(「当前的文芸諸問題」文芸生活海外版1948, 1)と論じながら、2ヶ月後には戦後マラヤに来て胡愈之等と活動していた夏衍の指示を受け南僑日報に「申述『馬華化』問題の意見」(1948, 3, 16)を発表し、前の論はマラヤの状況も知らずに書いたもので潜越であったとし、僑民派に同調して普遍的観点から“マラヤ化”派を否定したのであるが、こうした180度の変節を簡単にして見せる姿勢が“マラヤ化”派から「自身を真理の化身のように考え『導師』の冠を載き一切を幼稚と見做す」(趙戎「略論僑民文芸」星洲日報<星晨> 1948, 1, 15)「大国民思想」そのものであると非難されたのであろう。

しかしながら華僑大衆の意識は定住志向であった。南僑日報が1947年前半に行なった華僑社会におけるマラヤの将来の政治制度に関する輿論調査によると、回答者24,012人で次のような結果が出ている。<sup>(39)</sup>

1. マレー半島とシンガポールの合併を主張する者。約23,568人, 98.2%
2. マラヤの政治は各民族民主平等の原則の下に共同で管理す可しと主張する者。23,553人, 98.2%
3. マラヤはマラヤ人民の国家であるとする者。23,582人, 98.2%
4. 中国籍を離脱しないでマラヤの華僑はマラヤの公民となる可きである。22,951人, 95.6%

二重国籍を望むにしても定住傾向は顕著である。1947年のマラヤ生まれの華人が全華人口に占める割合は36%, 1957年には74.5%となり、1931年当時の69%と較べるとほぼ逆である。1947年の国勢調査では1931年生まれの人々の94%がマラヤから離れておらず、調査報告でも「華人はマラヤに居住することを好んでいる」という結論を出している。<sup>(40)</sup>こうした傾向はさらに10年後も顕著であることは表2からも読みとれる。

表2 出生地及年齢別華人人口集中統計 (1957)

Age	FM + SP	China	IDNE	IND
0-4	388,122	621	5	1
5-9	358,967	4,631	40	5
10-14	272,475	3,876	200	12
15-19	234,119	5,398	304	3
20-24	165,172	15,451	217	8
25-29	120,860	23,058	365	9
30-34	75,685	33,152	389	21
35-39	51,626	48,996	348	24
40-44	35,686	70,870	313	26
45-49	24,259	87,686	257	40
50-54	14,882	80,359	227	41
55-59	8,989	65,570	139	29
60-64	5,162	47,192	99	22
65 over	5,733	70,361	50	11

出所：1957 Population Census of the Federation of Malaya,  
Report No.40. pp81-82 より作製  
FM = Federation of Malaya, SP = Singapore,  
IDNE = Indonesia,

戦前は、パパ華人を除いてほとんど華僑は中国国民であると自覚していたのだが、それでも華人はマラヤの基幹民族の一つであるとする自覚はなかった訳ではない。1941年中国ナショナリズムの高揚する中、南洋商報に掲載された李秋の「論馬華民族属性問題」では次のように述べている。「マラヤの華人は定住してから長い年月を経ており、“マラヤ華人”と呼ばれる可きだ。人口比も大きく政治的にも覚醒し、文化水準も当地のその他の民族よりも進歩している。……これは全く現実のことなのである。……しかしマラヤ華人は経済的にも政治的にも、また言語的・文化・伝統的にも、中国から完全に離れることはできない。マラヤ華人はすでに特殊な派生集団を形成している。それは一方では中華民族の特殊な支脈であると同時に、当地では一つの重要な基幹民族となっているのである。」この李秋の声を「科学的な根拠がないし、民族の属性問題など持ち出す必要もない」「中国の抗戦建国過程における華僑の任務は抗日である」として圧殺したのは胡愈之や汪金丁等の中国作家達であった。また戦後凱旋した抗日軍を正規軍に編入せよというマラヤ共産党の要求が拒否され、さらに結社の自由、民主憲法、自治、全マラヤ会議の樹立、18才以上の選挙権等諸々の要求が軍政当局に無視されるという状況下で書かれた屈哲夫の「南洋華族的政治危機」（南洋商報1946, 1）では「華僑」に代えて「華族」とす可きであるとして、華人のマラヤに対する貢献を強調して次のように主張している。「ほとんどの華僑は『僑居』しているのではなくて『定住』しているのである。華人は南洋の繁栄に大きな貢献を果たしており、彼等は主人であって客体ではない。……これまで華族は政治に係わる権利を持っていなかったが、現在は政治に関与しなければならぬ時である。それによって我々自身、また子孫の為に幸福を創り出し、保障していかなければならない。ここは我々の故郷であり、別に我々の『家』はないのである。」

「血を流して」マラヤの防衛に当たると自負する華人文芸「マラヤ化」派の主張は、彼等自身がマラヤに対する帰属感を深めると同時に、一方では戦後の華人人口の定住化傾向を反映するものであった。それは華人の政治的帰属意識の問題であるが、「マラヤ化」派作家達は1949年以後マラヤの市民権を獲得し、中国国籍を放棄し、マラヤにアイデンティティーを見出すようになる華人大衆の意識を先取りして示していたと言える。

英軍政当局の非常事態発令の下に華人の政治、言論活動に対して嚴重な監視がなされるなかで、〈風下〉は1948年6月26日停刊し、胡愈之等中国作家は次々とマラヤを離れて帰国して行った。陳嘉庚も南僑日報によって中国共産党の宣伝を大に行なったが、1949年6月中国視察を名目にシンガポールを離れ、中国で政治協商会議副主席の職に就いたまま二度とマラヤには戻らなかった。これがこの論争の決着であったと言えよう。一方マラヤの国民党勢力は、マラヤ共産党の武装蜂起が始まって以来1948年8月までの間に40人が暗殺され、自衛の為の武器所持も許可されず、結局1949年中に解散し、翌年にはイギリスが中華人民共和国を承認したために中国領事館も閉鎖された。こうして中国志向の二つの政治勢力は組織としての姿を消した。華人社会の潜在的定住志向を背景として政治情況の変化によって、「マラヤ化」派の対立要素はここに消滅し、マラヤに帰属意識を持つ「マラヤ華人文芸」は成立したと言えることができるのである。

最後に1940年代の華人の意識を巧みに表現している桃木の詩の一節を記す。

祖父来開荒	祖父の代に開拓し
父親来建築	父親の代に建築し
輪到我們来	我等の代になったならば
人家不喜歡	人様あまり喜ばぬ
荒已開拓完	荒地も已に開拓し
摩天楼已建築好	摩天楼も已に建て
你要干什么	次は何をやるべきか
嚴励限制不放寬	嚴しい制限緩まない

入境又有新法令	入国するにも新法令
呈推勞工司	労働局に申請し
再請移民庁	次は移民局にお願いに
無銀压庫不承	担保がなければ許さない

祖父成骨灰	祖父はすでに骨になり
父親歸泥土	父も草葉の陰にあり
血汗化雲煙	流した血汗は雲か煙
我們在受苦	我等辛苦の中にある

先人業 后人得	先人の業は後人が得る
我們先人流血汗	我等の先人血汗を流し
我們后人無所得	我等後人得るものなし

應爭取 勿緘黙 争い取ろう、黙す勿れ

不合理 要反対	不合理あれば反対し
人人有権来過問	誰にも口出す権利あり
民主自由与平等	民主も自由も平等も
大家通通有一分	誰にもかかわることである。

## 結語

マラヤ華人文学史に底流、浮沈する“マラヤ化”志向と、対立してそれを抑止し、或は吞込んでしまう“中国派”の二つの潮流の間の論争を戦前・戦後に分けて検討した。マラヤ華文学に対する“中国派”の一貫した見方は、華人文芸は未熟でそして中国本土の文学運動に付随する支流である、というものであったが、それは同時に中国政治の華僑社会に対する考え方を映し出しているのではないだろうか。華僑社会における中国ナショナリズムの鼓吹は行き場のない愛国心を燃焼させたと思われてならない。それによって中国政治は物心両面の支持を獲得できたのであるが、華僑にとってそれは中国に帰国して政治に参加するか、或はマラヤが中国化するか、どちらかによってのみ完成されるという問題を含んでいた。だから戦後のマラヤの民族自治の潮流の中で、鋭敏な“マラヤ化”派作家達はマラヤに帰属して政治に参加することによってのみ生存の権利を保証できると主張し、その意味で中国政治は彼等の厳しい現実とは何の係わりもないと看破して“中国派”を批判したのである。植民地統治の箍の中で長期間華僑政治社会において培われて来た中国政治と一体のナショナリズムは、戦後箍が外された時その矛盾を露呈したのである。そしてこの時代を基点としてマラヤの独立運動は大きく展開を始めるが、その中で華人がマラヤで生きることを選択して行く苦悩を表現しつつ華人文芸は定着して行ったのである。

## 註

- (1) 拙稿「マラヤ華人文芸の発展と背景Ⅰ 1925-1928」,『三重大学人文学部文化学科研究紀要』第2号, 1985年3月。
- (2) 拙稿「マラヤ華人文芸の発展と背景Ⅱ 1929-1931」, 同上第3号, 1986年3月。
- (3) 方修編『馬華新文学大系』1巻, 星洲世界書局, 1972年, 259-262頁所収。
- (4) 梁志生の論文「地方作家介紹の商榷」等に代表される。前掲『馬華新文学大系』263-265頁所収。
- (5) 同上, 1巻, 278-281頁所収。
- (6) 同上, 284-297頁所収。
- (7) 同上, 282-283頁所収。
- (8) 楊進堯『戦前星華社会結構與領導層初探』新加坡南洋学会, 1977年, 166-168頁。
- (9) 同上, 28頁
- (10) 『第三調査委員会報告書——南洋華僑抗日救国運動の研究——』, 東亜研究所, 昭和20年, 246ページ。
- (11) 柯木林「新加坡僑匯与民信業研究」,『新加坡華族史論集』, 南洋大学畢業生協会, 1972年,

159-210頁所収, 170頁.

- (12) 前掲,『第三調査委員会報告——南洋華僑抗日運動の研究——』, 275ページ.
- (13) 同上.
- (14) 蔡松青「業余話劇社第一次社友座談会」, 1937年3月5日『馬華新文学大系』9巻, 11-15頁所収.
- (15) 前掲,『馬華新文学大系』9巻, 16-18頁所収.
- (16) 前掲,『第三調査委員会報告——南洋華僑抗日運動の研究——』, 279ページ.
- (17) 長井信一『現代マレーシア政治研究』, アジア経済研究所, 1978年, 93ページ.
- (18) 前掲,『馬華新文学大系』, 25-45頁所収.
- (19) 前掲,『馬華新文学大系』, 58-65頁所収.
- (20) 同上, 2巻, 66-69頁所収.
- (21) 同上, 86-88頁所収.
- (22) 同上, 83-85頁所収.
- (23) 同上, 77-82頁所収.
- (24) 方修『馬華新文学史稿』修訂版下巻, 新加坡世界書局, 1976年12月, 372-374頁.
- (25) 彼の体験と考え方はその著書『南僑回憶録』草原出版社, 1979年1月, に詳しく書かれている.
- (26) 陳嘉庚『陳嘉庚言論集』102, 103頁.
- (27) 催貴強「新馬華人政治認同的轉變」『南洋學報』第32巻, 1977年, 53-63頁所収, 54頁.
- (28) 陳嘉庚先生記念冊編輯委員會『陳嘉庚先生紀念冊』中華全國歸國華僑聯合会, 北京, 16, 17頁.
- (29) 前掲,「新馬華人政治認同的轉變」57頁.
- (30) 前掲,「現代マレーシア政治研究」178頁.
- (31) 前掲,「新馬華人政治認同的轉變」55頁.
- (32) Short, A. "Communist Insurrection in Malaya 1948-60." Frederick Muller Ltd, 1975, pp. 39-41.
- (33) Clutterbuck, R. "Riot and Revolution in Singapore and Malaya 1945-1963" Faber and Faber Ltd, 1973, p. 54.
- (34) 前掲,「現代マレーシア政治研究」173, 174ページ.
- (35) 新社新馬華文文学大系編集委員會『新馬華文文学大系』1巻, 教育出版, 199-201頁所収.
- (36) 同上, 201-204頁所収.
- (37) 同上, 208-211頁所収.
- (38) 前掲,「現代マレーシア政治研究」179頁.
- (39) 前掲,「新馬華文文学大系」1巻, 10頁.
- (40) Ratnam, K. J. "Communalism and the Political Process in Malaya" University Press of Malaya, 1967, p. 9.
- (41) 前掲,「新馬華人政治認同的轉變」55頁.